

# 「成長なき時代」をどう生きるか

～「蒐集」の限界と 21 世紀の利子率革命～

日本大学国際関係学部教授 水野 和夫

## ◆はじめに

「日本は衰退に向かうのか」ということに関してはじめに申し上げますと、「近代」という価値観をずっと持ち続けているとそれは衰退するということになると思います。このあと、近代というのはどういう時代だったかということ申し上げますが、日本は真っ先に近代を卒業できるというポジションにあると思いますので、私は全く衰退するとは思っていません。むしろ近代が目指していた目標を日本は世界で最も早く達成して、恐らく次の近代ではない時代に日本が一番早く到達できるということだと思えます。

もちろん黙っていてそうなるわけではなくて、いろんな問題を解決しなくてはならないと思いますが、アメリカやヨーロッパが抱えている問題点からすると、日本はそんなに大変ではないと思っております。

ただ、アベノミクスは「近代で頑張るぞ」ということでありますので、これはアベノミクスをすればするほど、私は衰退に向かっていくと思えます。三本の矢、バズーカ砲といわれているそうですけれども、そのことを勢いよくすれば、それは自分のところに跳ね返ってくるということなんだと思えます。

## ◆「蒐集」とグローバル化

ヨーロッパの指導者層には「社会秩序を維持するためには『蒐集』(しゅうしゅう)が一番大事だ」という考え方があります。「蒐集」とはコレクションですが、それを最も象徴しているのが「ミュージアム」です。日本では、「博物館」や「美術館」と訳していますが、「ミュージアム」という概念は日本にはありません。この言葉には、西欧の考え方を全世界に広めて西欧の普遍的価値観を世界中に広めていこうという意味があります。

大英博物館の展示室入口には、ロゼッタストーンが置いてあります。この人類最初の文字は、イギリスにあったわけではありませんが、あたかも文字を発見したのはイギリスであるかのようにミュージアムの中に一つの体系をつくっています。しかも入場料を取らないで、世界中の人に見てもらわないといけないということでもあります。

12～13 世紀に誕生した資本主義は何を「蒐集」してきたかという、資本や利潤です。そして、近代国家は何を「蒐集」してきたかという、極力領土を広げていくことです。

この資本主義と近代国家という枠組みの中で、1980

年代ぐらいからグローバル化ということがいわれるようになりました。これは「蒐集」するための一つのイデオロギーであると言えます。グローバル化は「ヒト、モノ、カネの国境を越える自由な移動」と言われていますが、そう定義すると、「じゃ、グローバル化に乗り遅れちゃいけない」と、グローバル化を推し進めようということになるので、しかしこれはグローバル化を推し進めている人からすれば、自ら参加を求めなくても相手から「参加したい」と言ってくることになるので、思うつぼだと思えます。

グローバル化というのは、その中心にいる人たちが「蒐集」を続けるのに最も良いシステムですから、中心にいない人たちは、「蒐集」される側に回るわけです。いま TPP (環太平洋連携協定) とかいろいろ交渉をやっていますが、これは「日本が中心になる」という意気込みでやるのでしたら、それはそれで良いのかもしれませんが、これは明らかにアメリカがアジアを「蒐集」するという宣言をしているに等しいと思えます。そういうことをよく考えた上で、日本は決めなくてははいけないと思えます。

## ◆デフレの長期化

今、世界経済は、例えばデフレが長期化しているとか、10 年国債利回りが 2 パーセントを割るといった問題を抱えています。これらの問題は世界中であらゆるものが過剰になり、傲慢になり過剰になっているという現象の一つであるといえます。

数週間前の『週刊東洋経済』で、パナソニックの社長がインタビューで、アメリカでバナナを買っている人がついでに 50 インチのテレビを買って物カゴに入れて歩いているという光景を見て、「このテレビどうするんですか」と聞いたら、「プールに置く」とか「倉庫に置いて観る」との返事があったことを紹介していました。

こうしたモノ余りの時代になってきて、テレビがコモディティ化(機能・品質などの差・違いが不明瞭化したり、あるいは均質化すること)しています。しかしながら日本はよりきれいに映るテレビを一生懸命作って売っているわけですから、世界の求めているものとは全く違うものを作って、さらに過剰に拍車を掛けているという状況だと思えます。

また、製鉄では、世界中で 15 億トンの鉄を作る能力があって、そのうち中国が約 7 億トンを占めてい

ますが、現時点では5億トン分の鉄工所が過剰設備になっていて、3分の2ぐらいしか稼働していないという状況があります。恐らくあと何年か経つと、私は自動車生産も過剰になってくるんだろうと思っています。

それから、世界の人口は約70億人ですが、OECD（経済協力開発機構）に加盟していない新興国ないしちょっと貧しい国の人口は56億人になります。OECDの14億人がものすごく過剰な生産や無駄遣いが行われて、一方最貧国では、1日1ドル以下で暮らし食事にも困っているという状況であります。

このまま今のシステムがずっと続くということとはほとんどあり得ないのではないかと考えています。

#### ◆近代の帰結

近代社会というのは、「より遠く、より速く」を実現してきました。ヨーロッパの最初の技術革新が大型帆船です。15世紀には、大砲を積んで大西洋を横断できる帆船の技術を確立し大航海時代となりました。また18世紀には蒸気機関などの動力革命がありました。

また、17世紀のデカルトやニュートンの時代では、神様中心から人間中心の考え方に変わりはじめました。神様中心の時代でしたら「聖書にこう書いてある」ということでみんな納得しましたが、個人が中心になると、みんな「自分が中心だ」と言い始めます。收拾がつかないわけですから、合理的な考え方、科学的な考え方に基づいて行動するということになります。

それが今どういうことが起きているかという、リスクが非常に大きくなってきているわけです。その一つの例が、原発事故。これは、安いエネルギーだと思ったのですが、1回事故が起きてしまうと損失額もいまだに分からないという、リスクが非常に顕在化してくるということになりました。

「より遠く、より速く」というのは、何のためにするかということですが、「人よりも遠くへ行って、さらに人よりも速く行った人ほど、より付加価値の高いものを得ることができる」という原理に基づいて利潤を極大化するためです。『パイレーツ・オブ・カリビアン』『インディ・ジョーンズ』あるいは『スター・ウォーズ』などの映画では、誰よりもより遠くへ、より速く行くことで主人公が英雄になるというストーリーです。

ところが「より遠く、より速く」という行動を起こして1単位資本をそこに投下したことによって得られるリターンが、今までは5～6パーセントという国債の利回りがあったのですが、今では0.3パーセントしかないというのが現状です。もう収益機会がないということです。

日本の映画で主人公になるのは『七人の侍』など、別に探検して遠くへ行っているわけではないということになりますので、日本はもともと近代的な考え方は、恐らくあまり持ってなかったんだろうと思います。ただ、ヨーロッパやアメリカが作った近代社会に乗り遅

れないように、日本は仮の姿でいるのだろうと思います。

「より遠く、より速く」を今の言葉で言えばグローバル化なのですが、アフリカのグローバル化をテーマにしたNHKスペシャルが2年ほど前に放映されました。アフリカの開発はこれから10年、20年、30年と続くでしょうけれども、この時点で、もう次により遠く行く場所がないということが分かってしまったということになります。

近代社会が数百年間追求してその時々繁栄してきた、スペイン、イタリア、オランダ、イギリス、アメリカ、それから日本は、利子率が低下し、今ではリスクのほうが多くなってきました。ということは近代の行動原理をもうする必要がないという状況に来たのだと思います。

つまり近代社会というのはもう勝負がついて、投資家から見るとゼロ金利ですからこれは「負けた終わり」です。一方、投資家でない人たちから見ると、バナナとテレビが平等になったわけですから、これは別に負けたのではなくて、過剰な豊かさを手に入れたわけです。

言い換えると、投資家が負けているなか、グローバル化でアベノミクスがこのままずっと「より遠く、より速く」行くこと自体を目的にしている限り、日本は衰退に向かうということになります。

#### ◆「宗教戦争」は「情報戦争」

12～13世紀まで知識というのは神様だけが持っていればいいと、いわゆるキリスト教に従事する教会で働く聖職者の人がラテン語さえ読んでいけば、他の人は別に知識を吸収する必要がないという世界でした。しかし今日ネット革命で何が起きているかという、70億人が全部というわけではないですけれども、スマートホンを手に入れることによって、誰でも世界中の情報が手に入れられるようになったということになります。

例えば「宗教革命」というのは、ラテン語とドイツ語の戦いでした。当時の出版会社というのは最大の資本主義産業だったそうですが、ラテン語はもうみんな行き渡っていて、ラテン語の本をみんな持っているわけです。今のテレビと同じ状況だったと思います。そこにルター（ドイツの神学者、1483～1546年）が、自分の教えをドイツ語で出版したことによって、新しいユーザーをいっぱい獲得できました。結局「宗教戦争」というのも「情報戦争」だったと解釈できると思います。そうしますと、人間の歴史というのは、常に多くの人に情報をいかに伝えていくかということであるとすれば、今ネット革命がそれを実践しているということだと思います。そうすると今の手メディアは、宗教改革のときのラテン語の世界だと思います。そう考えますと、恐らく10年か20年たつと大手メディアは完敗

しているのではないかと思います。

#### ◆著名人たちの警鐘

『モモ』で有名なミヒャエル・エンデ（ドイツの作家、1929年～1995年）は、「必要なものが、必要なときに、必要な町で手に入る」とが豊かさだと定義しています。また、「科学は進歩を、お金は成長を追い求めます。それは誰も疑わない現代の神話です」と、「神話」だと言っています。ということは、科学は進歩をもたらすかどうか分からないということです。原子力工学の例を見れば、福島原発事故では今だ16万もの人々が地元に戻れないという状況です。それからお金を求めて成長を求めたら、リーマンショックが起きて、派遣の雇い止めが非常に多くて、若い人のところに失業率がしわ寄せされているということが起きています。

またケインズ（イギリスの経済学者、1883年～1946年）は、「人々の暮らしに対する不平不満を解消できない場合、利子率を下げられないとき文明が破綻する」と言っています。現在のギリシャなどの南欧諸国がこの状況にあると思います。

日本では、日銀の統計によると金融資産を全く持っていない人が1987年のときには、わずか3.3パーセントだった比率が、2012年には26%まで上がってしまっていることが起きました。新自由主義的な人たちは「怠けているから悪いんだ」なんてよく言いますが、一生懸命働いていても蓄えがなくなっていくということが90年代から起きているということであり、このままでは、ますます不平不満が増えていくということになります。先ほどのミヒャエル・エンデは「豊かさを手に入れても、それが実際には国家破綻に結びついてしまう」とも言っています。

市場原理者のアダム・スミス（イギリスの経済学者・哲学者、1723年～1790年）も、ちゃんと『道徳感情論』で「ある一定以上の財産は追求しちゃいけない」ということを言っています。その他、ダンテ、シェイクスピアなどプレーキを掛ける人のほうが、それぞれ名を残しているのですけれども、途中途中で圧倒的な行け行けどんどの人が出てくるというのが今までの歴史だと思います。

#### ◆「蒐集」からの撤退

厚生労働省が発表しています一人当たりの賃金と、1990年以降の2回の景気の山谷の動向をみますと、いずれも景気が回復しても賃金は下がるということが起きていて、2012年の時点では1990年頃の水準に戻っています。どの辺が適正かはよくわかりませんが、このまま景気回復を続けても、また同じように賃金は下がると思います。

貿易黒字のときは、日本の財政赤字の多くは銀行が買っています。家計から銀行預金をしていると、その先には日本の国債があるということになります。しか

し貿易収支が赤字になると、日本の預金者だけでは日本の国債が買えないということと同じことになります。そうすると日本の国債は、資金調達をするために外国人投資家を買ってもらわなくてはならなくなります。ギリシャが国債の7割を外国人投資家を買ってもらうという状況になって、その外国人投資家が「ギリシャは信用ならない」と言って、利回りが30%まで上がるということが起きました。いったん国債の利回りが上がり始めたら、そして外国人投資家が国債を売ったら、もう手の付けようがなくなります。

現在の円安で原油高が続き、テレビとバナナが同じ土俵になってきたということを考えますと、日本はそんなにすぐに貿易黒字に戻るといった可能性は少ないと思います。そうすると、日本の財政は外国人投資家にある程度頼まなくてはいけなくなります。今後、国債利回りを1パーセントぐらいで安定して調達していくことが、本当は一番大事な金融政策だと思います。

#### ◆まとめに代えて

日本は近代の目標水準に達して、そこから次の所に一番先に行ける状況になるのに、それを破算にしてしまうというのが、今のアベノミクスではないかと思っています。日本は、これからも近代システムを続けて「蒐集」を続けるのか、もうそういうことからは撤退するのかという判断をしていく必要があります。

しかしながら、次のシステムはどうしたらいいか分かりません。分かれば多分、もう、いろんな問題は解決する方向に向かい始めていると思います。最初に「こういうシステムだ」という理論があるわけではなく、試行錯誤しながら、最終的に「多分これが何とかなるんじゃないか」というのが合意形成されていくと思います。グローバリゼーションが始まって、もう30年ぐらい経っているわけです。それでも全く見えてこないというのは、中間地点にも来てないということなのでしょうから、まだ相当時間が掛かるということです。「勝負の終わり」を伸ばし伸ばししながら、その間で、特に若い人に感じてもらうということではないかと思っています。（文責 参加型システム研究所）



水野 和夫（みずの かずお）